

明日の日本のために 平成23年6月16日

資料提供 岡山県議会議員 波多 洋治

メルマガ「蘇れ美しい日本」より

◎南丘喜八郎 月刊日本7月号巻頭感

〈亡国に至るを知らざれば、これ即ち亡国〉

日本は今、未曾有の国家的危機に直面している。

三月十一日午後二時四十六分、宮城県沖でマグニチュード9の大地震が起きた。その直後に沿岸地域を襲った巨大津波、加えて福島原発事故は、東北地方の沿岸部を壊滅させ、日本を混乱の淵に叩き込んだ。被災地の惨澹たる状況は筆舌に尽し難い。発災以来三ヶ月余が経過するにも拘らず、政権の無策により、復旧・復興の目途すらつかず、被災地の方々は自力で復旧・復興作業をせざるを得ないのか、と齒噛みする思いに違いない。

深刻な原発事故を誘発した未曾有の大震災は、戦争に比すべき国家の大事である。

この大震災は、我々日本人に、国家体制の一大変革を迫っている、と考える。そのために何を為すべきか。

- 一、独立国家として日本国憲法体制を徹底的に見直すこと
- 一、安易な米欧化を峻拒すること
- 一、共同体・社稷の再興を図ること

大震災という戦時に比すべき試練を克服し、国家再興を図るため、前記三点を実行に移すことが必要であると考え。加えて我々は、これまで進めてきた近代化の過誤を真摯に直視し、これを剔抉せねばならない。

近代化の過程で、犠牲を強いてきた東北地方の飛躍的發展を図ることも、国家再興の方途の重要な要素である。

今、我が国は亡国の淵に立たされている。かつて、明治天皇に直訴した政治家田中正造の言葉を噛み締めたい。

「亡国に至るを知らざれば、これ即ち亡国」

東北の犠牲の上に築かれた日本の近代化

今回の東日本大震災は、宮城、岩手、福島 of 東北三県を直撃し、死者・行方不明者は二万人余、今も八千人余が避難生活を余儀なくされている。東北地方はかつて「白河以北一山百文」と呼ばれ、経済発展の埒外に置かれ、光が当らぬ日陰の存在として、今日まで呻吟し続けてきた。

東北地方に適切な国家資本を投入し、インフラを確実に整備しておけば、今回の惨事を最小限に食い止めることが出来たかもしれない。大震災が東北に甚大な被害をもたらしたことを、近代化への鉄鎚と受け止めるべきではないか。

先ず、日本の近代化が、東北地方の犠牲の上に築かれてきたことを検証しよう。

今回の東北地方の惨澹たる被害状況を目の当たりにし、天明・天保大飢饉の際の惨状を思い起こさざるを得ない。

江戸後期の天明三年、東北各藩で大飢饉による餓死者が相次いだ。津軽藩では餓死者は男四万六八八二人、女三万四八二〇人に上り、南部藩では餓死・病死者合計六万四六九〇人、仙台藩では餓死者四〇万人に上ったという。

天明の大飢饉は明らかに人災である。儒学者細井平州を招き、藩政改革を積極果敢に進めた上杉鷹山の米沢藩は、この飢饉に際して、一人たりとも餓死者を出さなかったことが、それを証明している。

天明大飢饉のほぼ半世紀後の天保年間、またも東北で大飢饉が起き、津軽領内では餓死者四万五千人余を数えた。飢饉の影響は江戸、大阪にも及び、流民が放浪し、各地で百姓一揆や打壊しが頻発した。大阪で陽明学者大塩平八郎が死を覚悟して救民を訴え蹶起したのは、この時である。

明治維新以後も、東北地方の苦悩は続く。東北各藩は賊軍・朝敵として維新後も徹底的に差別を受け続けた。

官軍を自称した薩長両藩は、賊軍とされた幕府・奥羽列藩同盟との戊辰戦争に勝利し、明治維新政府の権力を独占した。薩長は軍・官僚を一手に掌握し、富国強兵のスローガンの下、日本の近代化を推し進めた。軍・官界で出世するのは薩長に限られ、賊藩たる東北出身者は如何に優秀であっても薩長出身者の下僚に置かれ、政策決定権を与えられることはなかった。薩長藩閥政権は、東北地方から資本・人材を徹底的に搾り取り、意のままに駆使し続けた。

近代化は対外戦争の勝利によって、加速度を増した。日清・日露戦役に始まり、大東亜戦争に至るまで、東北・北海道の農家から徴兵された屈強な若者が精強な兵隊に鍛え上げられ、戦地に送り込まれ、多くの若者が屍を戦地に晒した。農業の担い手を失った東北・北海道地方の農村共同体・社稷はその後、徐々に解体の道を辿ることになる。

しかも、東北地方には維新以後、国家による大規模な社会資本整備は殆ど行われず、昭和初期の大恐慌時に東北地方を襲った大凶作に農民は草根木皮を食べて飢えを凌ぐ状態が続いた。多数の餓死者すら出した。

この頃、娘の身売りも日常茶飯事になり、『日本農業年報』（昭和六年）には「山形県下で借金で首が廻らず、娘を人身御供に奉って金に換える者が四、五百人。最上郡西小国村では十五歳以上二十四歳未満の娘が合計四百六十七名の内、売られていった者は百十名の二十三パーセント、みな借金の犠牲だ」と記されている。

一君万民、君民共治の国家改造を志した皇道派青年将校は、五・一五事件や二・二六事件で決起したが、彼らの部下には、凶作に苦しむ東北農民の兵が多数いた。青年将校は娘を身売りせざるを得ない東北の惨状を深く憂えた。

「白河以北一山百文」と蔑まれた東北地方に、明治維新後初めて光を当てたのは平民宰相原敬だった。東北に複数の旧制高校を設置し、鉄道を開設するなど、社会資本を積極的に投下した。だが暗殺され、東北再生の夢は断たれた。

敗戦後、我が国は驚異的な経済復興を成し遂げた。それは、独立国家とし

ての矜持を忘却して、外交・安全保障を米国に委ね、経済一辺倒に徹した結果だった。昭和三十年代からほぼ二十年間、欧米を上回る経済成長を続け、一気に国民生産高世界第二の経済大国に躍り出た。

この戦後の高度成長を支えたのも、東北地方から集団就職で都会に就職した農家出身の若い労働力だった。

「金の卵」と持て囃されたが、就職先は下請けの零細企業か、大企業の臨時工だった。こうした高度成長の陰で農業の担い手を失った農家は衰退の一途を辿り、農村共同体は決定的な崩壊の時を迎えた。建設ラッシュに沸く大都会で、ビルや高速道路建設の下請けで働く出稼ぎ労働者は主に東北出身の農業従事者だったのだ。

こうして東北地方は日本が近代化を実現する過程で、資源、人材を供給し続けてきた。また福島は戊辰戦争で官軍から残酷な仕打ちを受けたが、福島原発は経済成長に必要な膨大な電力を提供してきたことも、想起する必要がある。

独立自尊の矜持を棄てて獲得した経済大国の地位

発災以来三箇月余が経過したが、政府は迅速・有効・的確な対策を講ずること能わず、拱手傍観を続けている。

これは単に、時の総理の政治家としての資質の問題ではない。国家機能が決定的に衰退したことに起因する。

原因の一つは、戦前戦後を通じて、薩長に源流を持つ政治家・官僚が、人材面でも社会的インフラの面でも、東北地方を終始犠牲にし続けた結果、国土の均衡ある発展が阻害され、国家機能が脆弱化していった。

もう一つは、戦後半世紀余の間、米国による巧妙な日本弱体化政策が功を奏し、日本人が国家意識を忘却、自らの欲望充足だけを目的とする、単なる欲望主体に墮してしまったことだ。独立自尊の矜持をかなぐり棄て、国家の安全保障を他国に委ね、只管、経済成長に突き進んだ。そこには独立国家としての矜持も誇りも見出だすことは出来ない。

「国家」より「社会」、「公」より「私」を重んじた我が国の戦後思想は、

国家的危機に際して、如何に無力であるかを、今回の東日本大震災は如実に示した。

ここで想起すべきは、戦後、米国が占領政策の第一に掲げた、我が国の徹底的弱体化である。占領政策の究極の目的は「日本国ガ再ビ米国ノ脅威トナリ又ハ世界ノ平和及ビ安全ノ脅威トナラザルコトヲ確實ニスルコト」である。

今日に至るも後生大事に戴いている「日本国憲法」「日米安保条約」は、この米国の究極の目的を達成する手段にすぎないこと、もう我々は気づいてもいい筈である。

大震災を大胆な国家改造の契機にせよ

今回の大震災は、こうした我が国の近代化そのものに鉄鎚を下した。我々は、今回の大震災を我が国の内なる敵との「近代化百年戦争」における決定的な敗北と受け止めるべきではないのか。

我が国は肇国以来、こうした敗戦のショックを真正面から受け止め、国家体制の抜本的な変革の契機としてきた。

六六三年の唐・新羅の連合軍に惨敗した白村江の戦い、幕末の黒船来航、大東亜戦争の敗北などを想起すればよい。我々の先人たちは敗戦に際し、容赦なく自らの欠陥を軼抉し、大胆不敵に国家改造を成し遂げてきた。白村江の敗北を契機に、唐の律令制度を導入、中央集権国家を作り上げた。幕末の黒船来航を契機に鎖国政策を大胆に切換え、米欧の先進文化を積極果敢に取り入れた。その結果、列強の植民地化を阻止し、世界五大国の一角を占める地位を獲得した。

この東日本大震災という近代化戦争の敗北を契機に、我々は戦後体制を大胆に変革すべきである。誇りある独立国家として日本国憲法を大胆に改廃し、安易な米欧化を峻拒して、日本国を再興しなければならない。加えて、国家機能を強化するため、崩壊の危機に直面する共同体・社稷の再建を図らねばならない。

「亡国に至るを知らざれば、これ即ち亡国」なのである。